

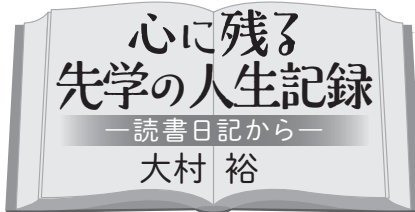
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.175
2018.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第3回

『角田文衛自叙伝』

(古代学協会 2017年)

本書は第一部「角田文衛の生涯」、第二部「理想の研究機関の構想」、第三部「初期論文」ならびに山田邦和による「解題」からなる。今回は紙面の都合で主に第一部冒頭の「自叙伝」と第二部の「理想の研究機関の構想」を取り上げることにする。

私は正直なところ、今まで角田文衛(1913~2008年)に対してあまりよい印象を持っていなかった。その理由を今詳細に語る余裕はないが(一口で言えば、かつて深い交流があった一部の先学たちに対する人物評が冷淡なところ)、この「自叙伝」を拝読して激しい感銘を受け、人間的にも深い敬意を抱き始めたことを告白せざるを得ない。彼の学識が広大にして深遠なことはあまねく知られているところであり、そのことについて私が言及する資格はない。私がこの本を読んで特に感動したのは、そうした学問の内容ではなく、理想を求めて一途に邁進し、そしてそれを実現してしまう情熱と行動力である。今回はこれにしばって紹介しよう。

1951年10月、角田は井上光貞・杉勇・曾野寿彦らと共に、親交のある考古学・古代史関係の学者を糾合して「古代学協会」を設立する。角田は、古代史学を「文献学」と「考古学」に分けることに反対で、それらを統合した「古代学」を構築することを目標としていたが、自分が所属する大阪市立大学ではその理想を実現できなかったため、大学の外に自分の目指す古代史学研究の基盤を確保しようとしたのである。

角田の学者離れした側面は、財界や地域の有力者などと巧みに人脈形成をすることであった。その基盤は、祖父角田林兵衛(東北地方の財界の大御所にして貴族院議員を務め、慈善活動にも熱心な人物であったという)や父の文平(角田家の養子。東京帝大農学部卒。角田家の資産を維持するために奮闘)とゆかりのある有力者、並びに母校である成城高校(旧制)、京都帝大の関係者たちであったかと思われるが、それだけではない。同郷のよしみを以て安藤正純文部大臣と懇意になると、その伝手で大坂商工会議所会頭の杉道助の援助を受けるようになる。そしてその杉の紹介状を持って経済団体連合会の植村甲午郎副会長、中野種一郎京都商工会議所会頭をはじめ大手企業の社長らと面会して情熱的に自分の理想を語り、協力を引き出しているのである。人脈形成の達人といつてよいだろう。ちなみに杉道助の助言によって古代学協会を財団法人化すると、大阪財界との連絡をよくするために大阪商工会議所事務局長を古代学協会の常務理事に迎えるなどの配慮をしている(後、会長にも有力経済人の高杉晋一三菱電機相談役を推戴)。

こうした各界の「大物」に臆せず接近できたのは、莫大な資産を持ち、地元の人々から敬愛されていた「角田家」の御曹司として大事に育てられた毛並みの良さと、作家の瀬戸内寂聴から称えられた「美貌」に、威厳が加わった、その容姿の故であったと思われる。前者について補足すると、角田家には多数の社員のほかに、広大な屋敷の中で働く約70人の使用人がいたという。彼らは幼少の角田に対して「文衛様」と

呼んでいたようである。祖父が急死した折、角田の母親(林兵衛の次女)は分家して千坪の家屋敷を譲られたというのであるから、その所有する総資産がどのくらいあったのか想像もつかない。角田が、常人には思いもよらない壮大な構想を次々に打ち出すことが出来たのは、自分の幼少時代の環境からみたら、それ程飛びぬけたものではなかったからであろう。日本銀行京都支店(敷地面積1800坪、建物は重要文化財)を古代学協会に払い下げてもらおうという発想は、普通の学者にはおそらくできない。1966年当時の評価は、土地だけで2億9800万円ほどだったのである。譲渡交渉に当たって日本銀行京都支店側は、発足して間もない民間の古代学協会を見くびっていたそうであるが、角田は自分に自信があっただけに(家柄・学識・学歴・業績等)、それを気に病むことはなかったであろう。さて、この代金をどのように支払ったのかというと、日立電気・関西電力・三菱系企業など有力企業から寄付金を集めてこれに充てたのであった。ところで寄付金を集めるためには、大蔵省から免税許可が下りなければならぬ。これが実現出来れば、会社は収益金の中から古代学協会に寄付金を出し、国はそれを損益とみなして諸税金をかけないということになるので、文化事業を応援しているというイメージを世間にアピールできる分、メリットが大きいのである。免税許可の取得に関わる事務作業や交渉の手間は相当なものであったろう。これに並行して博物館の開館準備、スタッフの確保、展示資料の収集などを推進する必要がある。これらを統括し、先頭に立って事にあたらねばならない角田は、到頭1967年3月に大阪市立大学教授の地位を退いたのであった。

平安博物館は、展示・普及・教育活動を重視する一般の博物館と異なり、研究員の研究・調査活動を重視する「展示施設附設の研究所」ともいふべき機関で、ここの研究員には教授・助教授・講師・助手・副手という職階を与えていた。国立民族博物館や国立歴史民俗博物館の先駆ともいふべきこの施設設立を、一民間人の角田が徒手空拳で成し遂げたのであった。

最後に私が特に感銘を受けたことを書いておこう。「坊ちゃん育ち」の角田ではあるが、かの大東亜戦争の折、初年兵の時期には古参兵に殴られまくり、終戦直前にはソ連軍の侵攻にあつて散々な目にあっている。その上、降伏後シベリアに長期間抑留されるという辛酸を嘗めているのである。この間、厳寒と飢餓で多くの仲間が死亡している。体が頑健ではなかった角田がこのような厳しい状況の中で何とか生き延びたのは、希望があったからであろう。その「希望」とは一体何か。亡くなる間際に角田が病床で何かつぶやいているので側近が耳を近づけると、「私には、まだまだやりたいことがあるのです」と言ったという。戦地で死線をくぐった後も、何度も大病を患いながら95歳の長命を保った秘密がここに隠されていると思われる。その強烈な学問への執念に私は強く心を打たれるのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録—読書日記から—(第3回) 大村 裕 …1
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡—女として考古学研究者として—(最終回) 岡田淳子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第168回) 平尾和久 …3
■考古学者の書棚 「ケルト」装飾的思考 鐵 英記 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(最終回) 岡田 淳子

㊤博物館とアラスカ会

考古学を専攻して卒業する頃、博物館には“学芸員”を置くのが通例になり、その資格取得が取り沙汰された。これは私に向いている仕事かもしれないと、資格単位を揃えようと試みる。当時は、まだ教育の制度が整っていなかったため、理学部・文学部・教育学部・教養学部と大学構内を走り回って意欲的に学んだことが懐かしい。

留学時には博物館学を副専攻として届け、米国のたくさんの博物館を見学した。けれど 大学勤務の35年のほとんどを教養の人類学教育に費やし、本当に博物館に役立てたのは、定年を迎えてから後のことであった。2017年度まで勤めた北海道立北方民族博物館での思い出は大きく心に残っている。館長とはいえ、後期高齢者の域に達し、風采も上がらず、来館者にはただのお婆さんに映っていたに相違ない。それでも私は、嬉々として館内の仕事に勤しんだ。

なかでも解説員研修は、日ごろの疑問を提起されるので直ちに改善につながり、より詳しく内容を知ってもらうことが出来て有益だった。新人の解説員はもちろんのこと、十数年勤めた人も、素直で向上心に満ちた好ましく得がたい人たちがばかりであった。

例えば、実大のイヌイト家屋の展示で、トイレについて来館者に聞かれても、参考書には書かれていないので答えられない。確かに経験した者でなければ分からないと思う。クジラの髯で出来たバケツが二つあったので、その一つが使われたに違いないと話す。北米北西海岸の大きなマスクも、それを被って成人式のテストを受ける様子を語る。解説員も興味を持ってくれたし、来館者たちは、より深い知識や感慨を受け取ることが出来たに相違ない。日本を中心にといった視点を正し、地球規模でものを考えてもらう一助にもなった。

常設展では考古学にも触れている。北日本の特徴的な「オホーツク文化」の展示を中心とし、主として北方の骨角歯牙製の彫刻とモヨロ貝塚の資料を見てもらっている。

この他に私が力を入れたのは、特殊な単語が多い出版物のミスプリントを無くすことだった。年末や年度末の出版物の多い時期には、学芸員は担当分をチェックするが、私は全てに目を通さなければならず、連日、快い疲労感に襲われていた。

幸せにも学芸主幹と主任学芸員がかつての有能な教え子で、職員や来館者たちに役立つ方法を次々と考えてくれたので、楽しく仕事を進めることが出来たのであった。真冬の2月、創立感謝記念行事のトナカイ橇に始まり、夏至祭や夏の特別展、秋の文化祭を経て、暮れのロビーコンサートまで、多彩で変化に富んだ行事が並んでいる。



▲北海道立北方民族博物館 正面入り口(網走市天都山オホーツク公園内、1991年に開館)

また当博物館のメイン行事の一つ、「北方民族文化シンポジウム」は、手作りから始まった肝煎りの国際的行事である。博物館開設準備中に日本の北方研究の拠点になるため発案され、網走市や館員が力を入れて育ててきたものであった。

1972年から約30年に亘り私たちは、アラスカを調査地として民族考古学を主とする文化人類学の調査を進めてきた。この発掘調査の成功は、ひとえに最初から手伝ってくれた「八王子遺跡プロジェクト」の若い考古学研究者たちの助力によるものであった。その人たちが中心になって、「アラスカ会」が出来、2018年の現在も続いている。

もともと「アラスカ会」の名称は、アラスカ州シトカ市のアラスカ・パルプに始まる日本企業の人々により作られたものであった。1960代から2000年代を通じてアラスカ経済の一翼を担った人々が、機関紙「アラスカ情報」を発行して、アラスカと日本の経済圏を知る得がたい情報源になっていた。やがて経済的価値が薄れ、ついに「アラスカ会」は閉会した。

私たちのアラスカ会はその頃に始めたものであり、同名で紛らわしい反面、日本人とアラスカとのつながりを続けるものとして、新たな価値が見いだされると思っていた。この新しいアラスカ会に参加している、かつての若者たちは当時、野生に満ちたピュアなアラスカを愛し、石器時代の心に親しんだ。

テント生活のなかで、来る日も来る日もツンドラに作られた貝塚の貝と海獣骨を掘り、日本のそれとは違う北方仕様の竪穴式建物跡を発掘した。多くの家に遺骨があって発掘は手間取ったが、その人たちがベーリング海峡付近から移動してきたことが確かめられた。厳しい天候のなかで、天然の豊かな温泉だけが救いだった。

参加者の多くが博物館関係の仕事を選んで、立派に社会人としての仕事を終え、定年後の現在は年に一度集まって、アラスカの情報を確かめ合い、思い出を呼び覚ます。また、多摩地域の発掘中の遺跡を見学し、後輩の調査員のお世話になって研究の推移を楽しみ、話題になっている博物館を見学する。このアラスカ会を今後どのように発展させるか、再考する時期が来ていると考えている。

アラスカ会は、多摩市にある私の家を、何時までもベースキャンプに使ってくれると言うので、これに応えて、私も「老いばれないよう頑張る」心算である。

(2018.2.26) 了

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010~2017年	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

今回で岡田先生の連載は終わりとなります。豊かなご経験を書いていただきありがとうございました。

177号はFumiko Ikawa-Smith(井川史子)先生にお願いいたしました。お楽しみに! 編集者

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Uレエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 168

三雲・井原遺跡 ～福岡県糸島市～

平尾 和久

私のマイ・フェイバレット・サイトとして、先日、国の史跡に指定された三雲・井原遺跡をご紹介します。

三雲・井原遺跡がわが国の考古学史上に登場するのは、いまから200年ほど前の文政五(1822)年の三雲南小路遺跡の発見にさかのぼる。福岡藩士青柳種信の『柳園古器略考』によると土堀用の土を採取するために、畑を掘ったところ深さ三尺あまりで、鋒を上に向けた状態の銅剣が出土し、その脇に銅戈、その下に朱入り小壺が出土したとある。さらに掘り下げると大型の甕棺にあたり、棺内から銅鏡を中心とする豪華な副葬品が出土したことが報告されている。

なお、この時に青柳種信は数十年前の天明年間に三雲村と井原村の境に位置する鑊溝で大きな壺から多くの銅鏡が出土していたことを知り、出土品の拓本や模写を残している。江戸時代に発見されたこれらの墳墓は現在、伊都国に代々いたとされる王の墓に位置付けられている。

その後、三雲・井原遺跡の本格的な調査は昭和49(1974)年から始まる三雲地区県営圃場整備事業に伴い開始される。福岡県教育委員会による調査で、昭和57年まで継続された。最も大きな調査成果は三雲南小路遺跡の所在地が特定されたことである。さらに、現在2号甕棺とされる新たな大型甕棺も確認され、王墓の時期的位置づけが可能になったことも特記できる。この他、加賀石地区における弥生時代前期の支石墓を含む墓群と居住域の確認、番上地区における楽浪系土器を含む土器溜まりの確認、端山・築山古墳の形状や規模の確認等も大きな成果であるが、遺跡の各所にトレンチを設定し60haにもおよぶ遺跡の広がりや概要が確認できたこと、基本的に盛土で圃場整備を行い、今日まで遺跡を良好な状態で保存できたことが特に重要である。

なお、三雲・井原遺跡の重要性は調査前から知られていたことから発掘調査指導委員会が設置され、地元の考古学者である原田大六が委員長に就任した。発掘調査の成果は5冊の報告書にまとめられ、本遺跡を知るうえで欠かせないものとなっている。

平成6(1994)年からは市教育委員会による発掘調査が開始され、調査指導委員会の指導を仰ぎながら継続的に実施した。まず、三雲南小路遺跡の確認調査を行い、2基の甕棺の周りに方形区画溝が巡ることが確認され、一連の調査によって、伊都国王が眠る大型墳丘墓の姿が明らかになった。当時学生だった私も調査に加えてもらったことを契機に三雲・井原遺跡との繋がりが始まる。

その後、平成10年に前原市に入庁したのちも先輩の職員について、三雲・井原遺跡を学ぶ日々が続いた。当時の調査目標は江戸時代の発見の後、所在地不明となっていた井原鑊溝遺跡を探すことであったが、結果的には古墳時代中期の集落域が確認され、「幻の王墓」の状態が今も続いている。

市教育委員会の調査は三雲・井原遺跡の範囲と内容確認を目的としたもので、遺跡の保存が前提であったため、遺構の掘り下げは必要最小限とした。それでも八龍地区で二重の併行する大溝の確認、下西地区における一辺50mの方形区画溝の



▲三雲・井原遺跡番上地区332番地現地説明会風景

確認、ヤリミゾ地区における有力者層の墓群確認など遺跡の具体的な姿が次々と明らかとなってきた。私は平成23年度から三雲・井原遺跡の調査担当となったが、古式の小形仿製鏡を出土した水路や、遺跡の縁辺部に形成された倉庫群を確認することができた。

また、平成25年度には、これまで複数の報告書に分かれていた調査成果をまとめ『三雲・井原遺跡Ⅷ 総集編』を刊行し、遺跡の重要性のアピールに一役買っている。

その後、平成26年～28年度の三力年にかけて、番上地区の確認調査を実施した。これまで水路新設に伴うトレンチ調査のみであったが、土器層とも言われるほど土器が堆積した土器溜まりが確認され、その中から30点ほどの楽浪系土器が出土していた。その集中度から楽浪郡からの渡来人の滞在が想定されていたが、土器溜まりの広がり等が未確認で、追加調査の必要性が高まっていた。調査の結果30点ほどの楽浪系土器が新たに追加され、番上地区における楽浪系土器の密集が再確認されるとともに、おなじ土器溜まりから複数の長方形板石硯が出土したことが新聞等でも大きく取り上げられ、文書を伴う対外交渉を主導する伊都国の性格がクローズアップされることになった。これらの成果は『魏志』倭人伝に記される「(伊都国が)郡使の往来常に留まる所なり。」の文言を彷彿とさせ、伊都国の対外交流の中核地域が三雲・井原遺跡の番上地区にあることが明らかにされた。

これらの調査成果の蓄積をもとに、平成28年度には市教育委員会が国へ史跡指定の意見具申を行った。翌平成29年6月16日には国の文化審議会から三雲・井原遺跡を史跡に指定する旨の答申が出され、10月13日には官報告示で正式に国史跡に指定されることになった。これは遺跡の発見から195年後のことであるが、これまで遺跡を守り続けてきた地元の方々による努力の賜物といえよう。今後は遺跡を保存しつつ、市民の拠り所となるような取り組みが必要となり、世代を越えた遺跡との関わりが求められよう。

私自身、入庁して20年目となるが、昨年度、新しい文化財担当職員が仲間に加わり、文化財保護の取り組みを世代を越えて引き継いでいく道筋ができつつある。今は一緒に現場に出ているが、ともに学び、遺跡の魅力を人々に伝えていく取り組みを続けていきたいと思う日々である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは坂本真一さんです。

考古学者の書棚

「ケルト／装飾的思考」

鶴岡真弓／筑摩書房(1989)

鐵 英記

ケルトという言葉は、何となくミスティックでミステリアスな響きがある。本書は私のモラトリアムの終わり、就職する直前に出版された本で、我が国におけるケルト美術紹介の嚆矢となったものである。最初にハードカバーを買い求め、文庫になった際にも購入しているのが、当時の私にとってはかなり気に入った本だったのである。

学生時代の私は主に弥生時代の勉強をしており、ヨーロッパ考古学の知識はあまりなかった。しかし、考古学的に見たケルト文化(特にブリテン諸島)が、ローマという文明の中心との関係や、鉄器文化という点で、弥生文化と大陸文化との関係に少し似ていると大雑把にとらえ、漠然とした興味も持っていた。だが、本書を手にとったのは、考古学的な興味というより、高校時代からケルトの神話・伝承を取り入れたファンタジー・コミックスに親しんでいたことや「装飾的思考」という耳慣れない熟語に惹かれたためだろう。

最初に著者の鶴岡真弓氏に触れておく。鶴岡氏は、ケルト美術を専門とする美術史家で、この本を上梓したのち、ケルト美術・文化に関する著作や翻訳を次々と発表していくこととなる。「ケルト」という言葉が我が国において一般化する原動力となった人でもある。我が家の書棚にも『装飾する魂』、『「装飾」の美術文明史』、『ケルト美術』、『ミステリアスケルト』、『古ヨーロッパの神々』などなど、そのいくつかは並んでおり、ある時期の私にとって、中野美代子氏(中国文化史:『西遊記の秘密』)、今橋理子氏(近世絵画:『江戸の花鳥画』)と並んで、著作が出版されると手に取ってしまう研究者であった。

次に本書の目次を引用しよう。

はじめに

序章 西のトポス

第1章 装飾の系譜—写本芸術の伝統

第2章 ケルトの想像力

第3章 渦巻文様の神秘学

第4章 北方動物の変容主義

第5章 組紐空間の呪縛

第6章 世界文様

第7章 ケルト復興

本書の基調となるのは、現在までヨーロッパに連綿と受け継がれてきたギリシャ・ローマ系の「調和」・「均衡」を基調とする地中海美術とは別に、「過剰」・「装飾」を基調するもう一つ流れ、「ケルト美術」を浮かび上がらせる試みである。

ケルト写本と総称される装飾過剰ともいえる福音書群を出発点に、その装飾の基盤をなす渦巻文様、動物文様、組紐文様の3要素に分けて、その淵源、発展と広がり詳細に述

べていく。と同時にこうした「装飾すること」にこだわった文化の担い手としてのケルト人を紹介することにもかなりの紙幅が費やされている。そして、最後は近代に巻き起こったケルト復興について触れ、その中ではアーツ・アンド・クラフツ運動やアール・ヌーボーの絵画を紹介している。

本書に挿図として掲載された『ダロウの書』、『リンディスファーン福音書』、『ケルズの書』などの装飾頁、装飾頭文字は、モノクロ図版ではあったものの、その迷宮性、魔術性、装飾性に衝撃を受け、のちにロンドンで『ケルズの書』の実物を見たことは、個人的な思い出としては大きなものである。また、「ケルト復興」の部分は、ウィリアム・モリスやミュシャが好きだった私にとっては琴線に触れるものであった。

ただ、ケルト文化の概念やその歴史的枠組みについては、本書が日本で発表された時期には、ブリテン諸島においてすでに大幅な見直しが始まっていた。

本書の基調をなす「ギリシャ・ローマ」の対抗軸としての「大陸のケルト」、その「大陸のケルト」がブリテン諸島に移住し、アングロ・サクソン、ゲルマンとの対峙の中でエスニック・アイデンティティを保持し続けたという通説的なケルト民族・文化観は、1990年代以降、ブリテン諸島における文献史学や考古学の分野では否定されるに至っている。鉄器時代における大陸のガリア地方とブリテン諸島の物質文化には相当の違いがあり、遺伝子解析でも両者の差異が認められているという。そして、「Celtic」という用語も、美術史・言語学の分野では残存するものの、歴史系の学術論文からは姿を消しているという(田中美穂2002「島のケルト」再考『史学雑誌』111巻10号)。

言語学上の「語族」、物質文化の集合体である「文化」、その話し手・担い手として人間集団を連結させることは、本来いくつかの前提条件をクリアして、あるいは、いくつかの留保のもとではじめて可能になる。しかし、時代の風潮により、解釈だけが流布してしまうこともある。そういう意味では、本書で語られたケルト文化・ケルト人をめぐる壮大な文化的展望は、まさに時代が要請した「ファンタジー」なのかもしれない。

ただ、ケルトの文化史的な位置づけが将来的にはどうなるかは別として、「ケルト写本」を我が国に紹介し、具象ではなく装飾に宿る情念に注目させたことは、本書の大きな特徴であり、功績の一つだと思われる。

アルカ通信 No.175

発行日 2018年4月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp